

【佳作】

「忘れてはいけない物語」

上富良野町立上富良野中学校

2年 山谷 惟一郎

「あの旗はアメリカじゃねえ・・・。あれはソ連だ！」

それは、北海道根室半島の沖合にある「北方領土」と呼ばれる島々をめぐる、長い長い戦争の始まりでした。

一九四五年八月十五日、日本は太平洋戦争に負け、満州や朝鮮半島などから撤退し、その領土の返還作業を始めました。ところが、同年の八月二十八日から九月五日にかけて、ソ連軍がアメリカの協力を得て、北方領土に上陸しました。そして、約五〇〇三平方キロメートルもの雄大な自然が広がる日本固有の領土と、一万七千二百九十一人の住民を不法に占拠しました。その瞬間、住民たちの日本への決死の引き上げが始まったのです。

「寛太、日本に帰ろう。」

この言葉は、北方領土から北海道への引き上げを実話に基づいて描いた映画、「ジョバンニの島」の中で、主人公・純平が弱った弟・寛太を勇気づけようと発した一言です。僕はこの映画を、いつの間にか純平の立場に立って、その世界にのめり込んで見ていました。純平が逆境の中で病気になった弟をその手で支え、ソ連兵に捕まった父を思う姿に心を打たれたからです。この映画では、弟・寛太の死という深い悲しみとソ連の子供たちと鬼ごっこを楽しむ姿が対比されていました。つまり、占拠された島の中でも、その悲しみや怒りが緩和される出来事もあったというわけです。先日、中学校で行われた、元島民の方による講演会でも、ソ連兵が来てから日本へ引き上げるまでは苦労の連続だったが、ソ連兵の隊長の家でカレーライスやスープをごちそうになった、などの思い出を語ってくれました。映画では最後、純平が数十年の時を経て、生まれ故郷の島に帰り、昔仲良くなったソ連の子供の孫娘と出会うシーンで終わります。その時、純平の目の中にはその少女への憎しみや怒りなどはなく、昔の友達の孫に会えたという嬉しさと感動でいっぱいだったように僕には見えました。元島民の方による講演会の時も、ソ連の人々との出来事を昔の思い出の一つのように話していました。

北方領土問題は未だに解決されていません。僕たち日本人は、この解決しなければならない問題に七〇年もの年月をかけてしまいました。そして長い歳月が、元島民の方の高齢化を進め、北方領土問題という存在を確実に風化させつつあります。また、度々行われている「日ロ首脳会談」では、北方領土問題の解決に向けての加速が確認されたり、元島民の方が自由に墓参、故郷訪問ができるようにすることを検討するなどの話し合いがされています。しかし、まだ、「返還」の二文字がロシア側の口から出されていません。両首脳もあと数年は変わらないとして、首脳会談という場だけでは話しが進展しないとすると、どうすればよいのか。残された道は、元島民の方が元気な今のうちに、日本国民一人一人が北方領土問題に関心を持ち、声を上げるしかないと思います。元島民がいなくなり、国民から北方領土という存在が消えれば、本当に北方領土問題は「未解決」になってしまいます。そうなる前に、北方領土問題について自分なりの考えを持つことが大事だと思います。そして、あのような悲劇が、もう世界で起こることのないように願っています。